

炉辺の枕(9)

『ナニワ金融道全 19 巻／青木雄二』

お金をめぐる人間模様

美賀多台 つだわたる

漫画は小学生のころから、かなり読んでいます。1960年代です。ほとんどが下校途中の本屋で、週刊少年漫画雑誌の立ち読みです。今は立ち読みは犯罪と意識していますが、その時はありませんでした。

親戚の家に行くと、少女漫画雑誌の古本まで引っ張り出して読んでいました。

思い出すままに書くと、月刊誌では『ぼくら』『少年画報』『まんが王』があり、週刊誌で『少年マガジン』や『少年サンデー』そして後発の『少年ジャンプ』『少年チャンピオン』がありました。

少女漫画『マーガレット』『リボン』は立ち読みはせず、従姉妹のお姉さんが読んでいたものを読んでいました。椋津かずお『へび女』は捜して読みました。

青年漫画雑誌は人目を憚って読みました。

手塚治虫を筆頭に藤子不二雄、石ノ森章太郎、赤塚不二夫、横山光輝、水木しげる、ちばてつや、ジョージ秋山等が好きでした。

この頃ジョージ秋山の『パットマンX』に非常に惹かれました。もしかしたら、その後の私の人生に影響を与えた漫画かもしれません。

漫画はまちがいに少年期に大きな影響を与えました。

今は、図書館にも漫画はありますが、その頃は置いていなかったように思います。文学文芸作品と見ていなかったということでしょう。

現在でも『神戸文学館』では、神戸ゆかりの文学者に横山光輝や水木しげるを紹介していません。

1976年に働き始めて漫画の単行本を買うようになりました。きちんと数えていませんが、手塚治虫が一番多くて、水木しげるや藤子不二雄もかなり買っています。

漫画でだれを一番に紹介するか考えましたが、成人してから一番影響を受けた漫画は青木雄二『ナニワ金融道』と岩明均『寄生獣』だと思いました。

それで手元にあった『ナニワ金融道』を紹介します。



資本論をもとに

青木雄二のエッセイを1、2冊読みましたが、かれは『罪と罰』と『資本論』を熟読してこの本を書いたと言っています。

最初は山陽電車に就職して、その後は水商売など転職を重ね30種以上の仕事に就いてい

ます。その経験をもとに人間を見ているようです。

『ナニワ金融道』は1990年から青年漫画雑誌『モーニング』に連載されました。バブルがはじけた時代を背景にしています。

大阪の消費者金融会社「帝国金融」で働く若手営業マンの灰原達之を主人公に、様々な事案を物語にしています。金融関係の法制度、慣習に精通し、そこに関わる人間たちの欲望の裏も表も知りつくたような漫画です。

灰原の最初の仕事は、電話での営業です。資金繰りに困っている土建屋が引っ掛かり、結局、返済できずに倒産します。灰原たちは、その連帯保証人になっていた公務員の娘に借金の肩代わりをさせます。退職に追い込み、ついには自己破産まで行きつきました。

灰原は、誠実で良心的な人物設定ですが、倒産する会社、社長から身ぐるみ剥ぐような仕事です。

「金融とは良心を売って金を儲ける商売なんや」という先輩の言葉を受け、灰原は「金融業を自分の天職に決めた」と彼の人生が始まりました。

土地の登記簿を偽造する詐欺「地面師」。借金で首の回らない公務員から「社会保険料を滞納している企業」リストを買い取る。連帯保証人になった女を「ソープに沈める」。

クレジットカードを何枚も作って借金の自転車操業。病院の分院をつくって風俗ビル計画をつぶす。先物取引に嵌って身を亡ぼす教頭先生。期限切れの映画の前売り券を使って金を儲ける方法。白紙の借用書にサインさせる方法など。様々な事例をもとに人生模様が描かれました。

犯罪、犯罪に近いことでも「見つからなければすべてが許される」という世の中であると断定し、知識のない者から容赦なく資産、金品を奪っていく展開の話もありました。勧善懲悪ではありません。

絵はどぎつい感じで、中心的な人物は普通の名前ですが、周辺の人物は「肉欲棒太郎」であり「赤貝信託」「蟻地獄物産」「大蛇市」と変な名前を付けています。

しかし面白い本でした。

日本は民主的な憲法を持っていますが、資本主義社会は金がある奴が勝つ社会、法律は強い者に味方するという前提をつくり、そこで弱小の消費者金融が智恵と汗で奮闘する漫画でした。